

都市部におけるミツバチ飼養の再検討

——ミツバチプロジェクトAの日誌を事例に——

玄  
蕃  
充  
子

## はじめに

日本民俗学の生業研究では等閑視されてきた養蜂が、二〇〇六年以降、都市部において積極的に行われ注目されている。その背景には都市部でミツバチを飼養するミツバチプロジェクトの存在がある。人口密集地域である都市部でミツバチが飼養されることにより、ミツバチという生物や採取できるはちみつに対しても再評価が行われるようになった。多様化するミツバチ飼養の在り方は、養蜂振興法の改正にまでいたった。生業でもなく、自家消費のためでもなく行われる養蜂の背景には、どのような理由があるのだろうか。

これまで筆者は、都内五つのミツバチプロジェクトの調査を行った。同じ都内のプロジェクトであっても、飼養するミツバチがニホンミツバチであるか、セイヨウミツバチであるか、発足の経緯、飼養に携わる集団構成、当核地域内での立ち位置などに違いがあることが分かった。

本稿では、ミツバチプロジェクトAを事例として当核地域において継続されるミツバチ飼養の現状を明らかにし、その背景や意図を再検討する。

## 一、問題の所在

これまで、日本において行われてきた養蜂は、当該地域を中心とするニホンミツバチを用いた自家消費目的の養蜂と、明治時代にアメリカから輸入されたセイヨウミツバチを用いた、はちみつ生産を主目的とした専門的な養蜂であった。

在来種であるニホンミツバチは、江戸時代以前より飼養の実態があり、日本人がミツバチを認識していたとい

う点においては、『日本書紀』皇極二（西暦六四三）年までさかのぼることができる。ニホンミツバチは、環境変化に対して神経質である。外敵にも敏感であるため逃亡性が高い。そのため、人間が野生のニホンミツバチを捕獲して飼養しても、飼養環境に適應できないと逃げてしまうことがある。採蜜量はセイヨウミツバチに比べて少なく、一匹のニホンミツバチが集めることができるはちみつは、ティースプーン一杯程度である。また、年一度程度の採蜜となるため市場に出回る量が少なく高価格で取引されるが、逃亡性のリスクや安定した採蜜が困難なことから生業としての成立にはいたらず趣味的で自家消費的な飼養が多い。一方で、当該地域の環境の蜜源植物によりはちみつの味に地域差があるため、近年では地域ブランドとして町おこしなどにも利用される。

セイヨウミツバチは、明治時代にアメリカから輸入され、実験的な飼養が重ねられた。セイヨウミツバチは、ニホンミツバチに比べて環境適応力が高いうえに、飼養においても巣枠やはちみつ用の遠心分離器など養蜂器具も開発されていたため、効率よくはちみつを採取することが可能であった。このように、安定的なはちみつ生産が可能であり、大正時代に転飼養蜂が確立されたことで、日本におけるはちみつ生産の主流はセイヨウミツバチが多くを占めていくことになった。

セイヨウミツバチで行われる転飼養蜂とは、日本国土の緯度差・標高差を利用し、蜜源となる花木の開花に合わせて南日本から北日本へ移動する方法である。対して、移動を行わず、当該地域の環境に合わせてミツバチを飼養する定飼養蜂という方法もあり、主にニホンミツバチの飼養で行われてきた。

さらに近年では、定飼養蜂の一種として、都市のビルの屋上などにミツバチの巣箱を設置し、ミツバチに周辺の公園、庭の植物などから蜜や花粉を採取させる方法をとる「都市（型）養蜂」もみられ、ミツバチ飼養の展開には新たな一面が加わった。

筆者は、この「都市（型）養蜂」であるミツバチプロジェクトに注目し、従来日本において行われてきた養蜂と二〇〇六年以降続いて開設された、都市部でミツバチを飼養するミツバチプロジェクトを比較し、ミツバチを

介した都市社会の再構築の課題と可能性を検証した。<sup>(1)</sup>

当該論文では、まず農林水産省生産局畜産部畜産振興課の『養ほう関係参考資料』<sup>(2)</sup>を用いて、統計資料から養蜂の動向を把握した。概要は次のとおりである。昭和五十年の全国のみつばち飼養者数が九、一三九戸であるのに対し、平成二十二年の飼養者数は五、三五三戸と約六割に減少し、蜜源も昭和五十年に四四万五、七二二ヘクタールであったのが、平成二十一年には十五万八、九四一ヘクタールにまで減少しており、養蜂家がミツバチを飼養するのに厳しい状況になっていることが分かった。

しかし、東京都では、蜜源が昭和五十年に一、一一六ヘクタールであったのが、平成二十二年には十四ヘクタールにまで減少しているにもかかわらず、飼養者数は昭和五十年に十八戸であったのが、平成二十三年には百三十戸まで増加していた。蜜源が減少している東京都で養蜂家が増加している背景には、都市部において行われるミツバチプロジェクトの存在が浮かび上がった。ミツバチプロジェクトとは、民間団体・企業・NPOが公園や住宅の花木を蜜源として都市部の屋上などでミツバチを飼養する計画である。その多くは、町の活性化や自然保全を目的としていた。

従来日本で行われてきたニホンミツバチを用いた養蜂やセイヨウミツバチを用いた専門的な養蜂と、ミツバチプロジェクトの開設目的や飼養形態を比較すると、従来の養蜂とミツバチプロジェクトは、ミツバチの飼養における技術や方法的に大きな差異は見られないものの、養蜂におけるハチとヒトとの関係、養蜂を介したヒトとヒトとの関係に違いがあることが明らかになった。従来の養蜂は、ヒトとヒトとの関係を前提にハチとヒトとの関係が成立していたのに対し、ミツバチプロジェクトは、ハチとヒトとの関係によってヒトとヒトとの関係を形成しようとしていたのである。ミツバチプロジェクトは、ミツバチを一緒に飼養するという意識の共有によって、ヒトとヒトとが更新的な関係を持った地域社会を構築しようという理念を有していたが、ミツバチの飼養は当該地域・集団の中の一部の限られた人々によるもので、主体となる地域の多くの人びとは参画することができない

という課題も明らかになった。

また今後の課題として、ミツバチプロジェクトにおいてミツバチの飼養が自然保全の目的となっていたことや従来の養蜂がミツバチとヒトという自然とヒトとの関係を前提としてきたことから、ミツバチを介した自然保全という視点と養蜂による自然管理や自然保全の可能性に注目する必要がある<sup>(3)</sup>。

分析の結果、ミツバチプロジェクトは、名前のついた一匹の女王蜂を中心とした蜂群を持続的に飼養することに意味を見出ししており、専門的な養蜂家は経営計画に沿った女王蜂の選別を行うことで更新的な飼養を行っていることが明らかになった。その一方で、当時の研究対象であったミツバチプロジェクトAの女王蜂の寿命は、最長でも一年五ヶ月（二〇一二年時点）であり、毎年新しい蜂群を購入していたため、厳密には持続的な飼養とは言い難く、プロジェクトが目的としている自然保全への矛盾や、かえって都市部がミツバチを飼養できる環境ではないという結果を想起させることとなり、都市部でミツバチを飼養する意味、ミツバチプロジェクトの存続について再考が必要であるという新たな課題が明らかになった。

さらに、追跡調査を続ける中で、当初ミツバチプロジェクトが目的としていた自然保全や当該地域の活性化だけではない背景が内在している可能性にくわえ、二〇一二年の養ほう振興法の改正によって養蜂を取り巻く諸問題が顕在化してきており、都市部でミツバチを不特定多数の人々で飼養する意図について再考する必要があると考える。

本稿で事例とするミツバチプロジェクトAは、二〇〇九年三月に活動を開始し、二〇一八年で九年目となる。追跡調査からミツバチプロジェクトAがミツバチを介してどのような集団や社会を構成しようとしたのか再検討を行いたい。本稿ではその第一段階として、ミツバチプロジェクトAの日誌の分析を行う。

## 二、ミツバチプロジェクトの発足と展開

ミツバチプロジェクトとは、商工会や企業、NPO団体、大学教育機関などが中心となり不特定多数の人びとが、主に都市部のビルの屋上などでミツバチを飼養するもので、二〇〇六年の銀座ミツバチプロジェクト（中央区）を皮切りに、二〇〇八年には中延養蜂プロジェクト（品川区）、多摩ミツバチプロジェクト（多摩）が、二〇〇九年には丘ばちプロジェクト（自由が丘）、すみだ百花蜜プロジェクト（墨田区）が、二〇一〇年には、サツポロ・ミツバチプロジェクト（札幌）、梅田ミツバチプロジェクト（大阪）、二〇一一年渋谷みつばちプロジェクト、さいたまミツバチプロジェクト、二〇一三年江東みつばちプロジェクトなど、他にも大分、仙台、名古屋にも広がりを見せている。

ミツバチプロジェクトが全国的に広まった背景には、銀座ミツバチプロジェクトの存在がある。銀座ミツバチプロジェクトは、岩手県で養蜂場を営むF氏が中心となり、二〇〇六年三月に銀座三丁目紙パルプ会館屋上で開始された。中央区銀座という都市部で行われる養蜂は広くメディアの注目を集め、毎日新聞、読売新聞、地域誌、複数のテレビ局による放映、インターネット上のニュースサイトにも掲載された。その存在は銀座の中だけではなく多くの人々に認知され、知られることとなった。銀座ミツバチプロジェクトは街の活性化、地域の人々の交流、自然保全などを成功させた事例として対外的に評価されることになったのである。そして、各地のミツバチプロジェクトは、銀座ミツバチプロジェクトに触発される形で、街の活性化、地域の人々の交流、自然保全などが期待できる新しいツールとして、ミツバチ飼養を行うこととなった。

次に、具体的にミツバチプロジェクトAを事例として、ミツバチプロジェクトがどのような目的を持って発足し、展開していったのかを確認していく。

ミツバチプロジェクトAは、二〇〇九年に発足し、二〇一八年で九年目となる。東京二十三区内にある人口七五〇〇人程の街で行われている。商店街振興組合が主催し、住区の人びととともにビルの屋上でセイウミツバチを飼養している。当該地域は、閑静な住宅街によつて形成され、駅前には商業地区としてにぎわっている。プロジェクトの構成員は女性を中心であり、入会費はなく、ボランティアによる活動である。住宅街が主となるこの地域において、住宅の庭や公園の植木が採蜜花木となる。

ミツバチプロジェクトAを主催する商店街振興組合は、当該地域にある十二の商店街を一つの組織として取りまとめ、イベント開催や共同事業、環境整備など街づくりの主体となっている。同プロジェクトは、商店街振興組合主催「森林化計画」の一環として始まった活動である。環境指標生物であるミツバチを用いることで、当該地域の自然環境の把握と保全を行おうとした。聞き取りによれば、二〇〇九年の発足時、商店街・住民会議で行われた説明会において反対意見はなく、応援する声や協力する声が多かったという。当初、住区からのボランティアは、住民会議に説明会参加者のうち二人の女性が協力者として参加することになったが、その後、ブログや、地域冊子を見て参加する者が増えたという。

では、実際にどのような活動がこの八年間で行われてきたのだろうか。活動日誌とインタビュー調査をもとに分析を行う。活動日誌とは、ミツバチプロジェクトA発足時より、プロジェクトの活動日に書かれた日誌で、蜂群や女王蜂、巣の状況など飼養箱内の様子を確認する内検作業の内容について記されたものである。活動日誌の中で公表できる範囲の情報と聞き取り調査をもとに、概要を(一)二〇〇九年時発足時～二〇一〇年、(二)二〇一〇～二〇一二年調査時、(三)二〇一三～二〇一七年追跡調査時の三つに分けてまとめる。それらと、八年間で飼養した女王蜂(蜂群)の一覧からミツバチプロジェクトAの活動の変遷について分析する。

## (一)二〇〇九年発足時～二〇一〇年

銀座ミツバチプロジェクトY氏より指導を受けながら三群を飼養開始。採蜜だけでなく、蜜ろうづくり、蜜源見学など、積極的にミツバチの飼養からなげが出来るか検討している様子が日誌からうかがえる。特にニュースリリースに力を入れており、テレビ取材は年間六件にも及んだ。他の商店街や企業をはじめ、中には「自身の地域でやってみたいので勉強にきた」という見学者もみられた。

活動は週に一回三～五人で行われているが、「途中の雨で混乱した。採蜜途中だが、倉庫にしまい、明日へ持ち越しとなった。明日は、予定外であるが生き物と自然が相手では仕方がない」など、雨天の際には内検や採蜜の作業ができないなど天候に左右されることが多く、商店街の組合を母体とする中で、ボランティアとの関係もありスケジュール管理の難しさについて指摘されている。また、二〇〇九年から二〇一〇年の間で、飼養箱を置く場所の変更が幾度か行われている。日誌には明確な理由は書かれていないが、ヒトの環境の中で、ミツバチを飼養する難しさを感じている様子がある。二〇一〇年には、風よけなど飼養箱を置く場所の環境を整える作業が行われるようになる。

## (二)二〇一一年～二〇一二年調査時

日誌からは、三年目で内検作業などに慣れた様子がうかがえる。

二〇一一年調査時の聞き取りでは、ミツバチプロジェクトAの女王蜂には名前が付けられていることについて「愛情を持って飼養するため、初めてミツバチを飼養する人にも親しみやすくするために全員で考えたという。

セイヨウミツバチであるので西洋風の名前、画数なども考慮し、名前を決定する会議を行なったという」(玄蕃二〇一二)にもあるように、家畜の飼育というよりも地域全体のペット的側面が強いように感じられた。

一方で、二〇一二年四月に購入したミツバチには、「昨年強かった女王にあやかり」同様の名前を付けるなど、

個としての女王蜂のペット化よりも、むしろ女王蜂を中心とした蜂群の符号的側面がみられた。また、二〇一一年には、女王蜂を失った群を他群と合わせて一つの群にする合同<sup>3)</sup>を初めて行っており、女王蜂の持続的飼養が難しい現状に向き合っている様子がうかがえる。

### (三) 二〇一三～二〇一七年追跡調査時

追跡調査時の二〇一三年には、四群を飼養し、女王蜂の更新的飼養が行われ、継続的活動が行われている。環境づくりにも力を入れており、蜜源となる植物を植えるプロジェクトやイベントを商店街振興組合に限らず、鉄道会社などと協力して開催している。

二〇〇九年から二〇一七年の八年間で、ミツバチプロジェクトAがミツバチの飼養に慣れた様子が確認できる。一方で、蜂群数の持続的飼育は難しく、越冬できずに全滅してしまうこともある。しかし、新しい蜂群を購入してまた一からミツバチの飼養を行っており、別の蜂群の王台移植によるに女王蜂のコントロールと購入による持続的・継続的な飼養を試みている。

表1 ミツバチプロジェクトA 女王蜂一覧 [筆者作成]

女王蜂の個体	購入/誕生	女王蜂死/全滅	寿命	備考
ジョアンナ	20090618	20101124	1年5ヵ月	★購入
キャサリン	20090618	20090619	1日	★購入
アマゾネス	20090618	—	9ヵ月以上	★越冬中に全滅か?
アンジー	20090722	20091220	5ヵ月	★アマゾネスの王台をキャサリンの群に移して誕生
アンジー	201003?	20101027	7ヵ月	
エリザベス	20110325	20110511 行方不明	2ヵ月	★購入
メグ	20110325	20111026 行方不明	7ヵ月	★購入
エリザベス姉	20110518	20110708 行方不明	2ヵ月	★エリザベスの王台より誕生
エリザベス妹	20110518	20120224全滅	9ヵ月	★エリザベスの王台より誕生 ★7月にエリザベス姉の蜂群と合同
メグ2世	20111026	20111122 行方不明	1ヵ月	★メグの王台より誕生
エリザベス	20120404	20120620	2ヵ月	★購入
クラウディア	20120404	20130605	5ヵ月以上	★購入
エリザベス	201207?	20130821	2ヵ月以上	★クラウディアの王台からエリザベスの蜂群に移して誕生 3つのうちの1つ
サラ	20130319	—	—	
クラウディア2	20130615	2013 行方不明	—	★サラ群より王台移植
クラウディア3	20130724	2013 行方不明	—	★サラ群より王台移植
エリザベス	20130904	—	—	★クラウディア3より王台移植
エリザベス	—	20150325	—	
サラ	—	20150710	—	
エリザベス母	20150325	—	—	
レオノール	20150416	2016春	1年	★購入
エリザベス娘 (カコ)	20150509	2016冬全滅	10ヵ月~1年	★エリザベス分蜂群
新サラ	20150710	2016冬全滅	10ヵ月~1年	★サラ群の王台より誕生
レオナル	20160608	2016冬全滅	6ヵ月~ 10ヵ月	★野生分蜂群
エリザベス	20170324	20170810	5ヵ月	★購入
カコ	20170324	20170718	4ヵ月	★購入
サラ	20170324	20170704	4ヵ月	★購入
サラ2	20170802	20171004	2ヵ月	★スズメバチが原因か?
カコ2	20170727	20171101	3ヵ月	★王台より誕生
エリザベス2	20170817	20170906	1ヵ月	★王台より誕生
エリザベス3	20170913	—	—	

\* 2014年日誌未確認

## 三、ミツバチプロジェクトAの日記から

前章では、ミツバチプロジェクトAが発足してから八年間の日記を三つの段階に分けた概要と女王蜂の一覧を表にまとめた。

ミツバチプロジェクトAは、商店街振興組合の職員と住区の人々、三〜五人によって毎週一回内検作業が行われている。飼養する蜂群は二〜四群である。その周年活動は、三月末〜四月初旬に活動を開始し、おおよそ十一月の初旬には越冬の準備を終えている。専門的な養蜂や自家消費の養蜂同様に、当該地域の自然環境に合わせた飼養を行っている。蜜源の広狭に差はあるものの、天候や気温、湿度に左右されやすい面では同条件のもと飼養を行っているといえるだろう。

ミツバチプロジェクトAの発足時には、専門的養蜂の方法を参考に飼養を行い、飼養場所や、取材対応、内検のタイミングなどヒトの都合や環境にミツバチを合わせる形での飼養となっているが、二〇一〇年以降にはミツバチにとってより良い環境づくりを行い、以降はミツバチに合わせた飼養方法を模索している。

二〇一一年から一二年頃の聞き取り調査では、女王蜂に名前をつけて愛着を持っている様子から、生業的な面よりベットのな意識が強いように感じられたが、八年間の中で、以前の女王蜂にあやかり同じ名前をつける、女王蜂がいなくなった後も「○○(女王蜂の名前)群」と呼ぶなど、女王蜂の個体に対する愛着だけではなく、蜂群に対する符号的な側面があることが分かる。日誌からも二〇〇九年〜一〇年頃までは、女王蜂そのものを名前と呼んでいるのに対し、以降は女王蜂という記され方であり、名前は群につけられている。

專業養蜂家は次年度の養蜂計画と女王蜂の様子から選別を行い、分蜂や群の整理を行う。女王蜂には、多くの卵を産む女王蜂、採蜜量の多い女王蜂など、目的別に女王蜂が分かれており、女王蜂の性質をコントロールする

ことで持続的な養蜂を可能としているのである。

表1のミツバチプロジェクトA 女王蜂一覽によれば、ミツバチプロジェクトAが飼養してきた女王蜂の寿命は早くて一日、長くて一年五ヵ月であり、指摘してきたとおり、一匹の女王蜂の持続的飼養ができていないことが分かる。しかし、環境を整えるなど一匹の女王蜂を持続的に飼養する方法の模索は行いながらも、弱っている女王蜂がいればすぐに別の蜂群の王台を移植して新しい女王蜂を誕生させる試みを行っている。また、越冬できずに全滅してしまった場合には、蜂群を購入してミツバチの飼養をやり直すなど、養蜂そのものの持続的・継続的な飼養を試みる選択が行われている。

つまり、一匹の決められた女王蜂の持続的な飼養から女王蜂を変えてでも蜂群を持続させていく飼養に変化していると言える。換言すれば、都市部の飼養では、一匹の女王蜂を継続的に飼養することは難しく、多くの群を飼養していない以上、養蜂自体を持続的に行うには、毎年新しい女王蜂を更新する必要があると考えられる。

ミツバチプロジェクトAは、八年前で、都市部での飼養には専門的な養蜂の方法が適していないことから、当該地域の環境に適応したミツバチ飼養を模索してきたのである。しかし、生業より趣味的な養蜂といえるミツバチプロジェクトであるが、継続するには、客観的にはコストが多くかかっているようにみえる。コスト面において非効率であるのにもかかわらず、ミツバチプロジェクトを継続していく背景にはどのようなものがあるのだろうか？ 四章では、再度ミツバチプロジェクトAの目的を整理し、当該地域でミツバチを飼養する背景や意図について検討する。

#### 四、ミツバチプロジェクトAの目的と課題

前章では、八年前新しい女王蜂を購入している点において、コスト面において効率的ではないことを指摘した

が、ではなぜそうしてまでミツバチプロジェクトAを継続するのだろうか。

これまでの研究では、ミツバチプロジェクトAが、ミツバチの飼養をはじめた背景として、環境保全と商店街の活発化を取り上げた。この二点について再度検討を行う。

### (一) ミツバチによる環境保全

従来日本で行われてきたニホンミツバチの飼養においては、当該地域に生息するミツバチを捕獲して飼養していた。環境変化や外敵に敏感で神経質なニホンミツバチを持続的に飼養するために、飼養箱の設置場所の工夫などは行われるが、当該地域の環境に対して植樹など人間から自然環境づくりをすることはない。

山梨県南巨摩郡早川町では、自家消費的なニホンミツバチの養蜂が盛んであるが、聞き取りの中では、「昔に比べて自然がなくなつた。ミツバチがいなくなつた」という。ミツバチが昔に比べていなくなつたことと、自然がなくなつたことが等号で結ばれていることが分かる。つまり、ミツバチは環境を把握する基準のひとつで、まさに環境指標生物として認識されてきたのである。

一方のミツバチプロジェクトAでは、ミツバチを基準として環境づくりをしている。ミツバチが飼養できることと自然環境が豊かであることが等号で結ばれている。一見、山梨県南巨摩郡早川町の事例と同様に環境指標生物であるようにみえる。しかし、山梨県南巨摩郡早川町の事例は、当該地域の自然環境の変化をミツバチという環境指標生物でみているのに対し、ミツバチプロジェクトAでは、ミツバチが飼養できる環境が自然環境として、目標値となっている。ミツバチプロジェクトAが目指す自然保全とは、ミツバチが活動できる模擬的な自然環境であり、ミツバチを飼養できる社会環境である。

## (二) 商店街の活性化

ミツバチプロジェクトAが期待する商店街の活性化とは、都市部でミツバチを飼養するという当該地域外に向けた宣伝効果と、共通の環境指標生物を飼養することで、共有の意識を形成し、まちづくりの一員になってもらうという地域内に対する意図があった。

ミツバチプロジェクトAが従来日本で行われてきた養蜂と異なる点のひとつには、不特定多数による飼養であることであるがあげられるが、ミツバチプロジェクトAの当該地域においては、商店街振興組合の職員と住区の人びとによつてミツバチの飼養が行われている。しかし、ミツバチプロジェクトAに関わるのは一部の住区の人々に限られ、大多数の住民からは等閑視されているという課題を指摘した。

実際、八年経過していた後でも、飼養に関わっているのは一部の住区の人に限られている。一方で、商店街内のケーキ屋で採取したはちみつを利用した洋菓子の販売や、商店街のイベント行事でのブースの出店、自然保全活動でのアピールなど、周知への取り組みは、変わらず行われている。また、八年間の活動の中で、ミツバチを飼養することによる大きな事故が起こっていないことが信頼関係へとつながり、理解者・仲間をつくっていくことにつながっていると考えられる。

商店街の活性化という点においては、活性化の目標となる具体例と統計的なデータがないため、今後の研究では、商店街のイベント行事やはちみつ、蜜ろうの利用方法について再度調査を行い検討することで、ミツバチプロジェクトAが目指した商店街の活性化がどのようなものであるのかについて考察を行いたい。

ミツバチによる環境保全と商店街の活性化について検討したが、共通するのは継続的な飼養が必要であるということである。環境指標生物であるミツバチが持続的に飼養されることが環境保全であり、ミツバチプロジェクトAが継続されているという事実が、ヒトとヒトとの関係の継続につながっている。銀座プロジェクトのような話題性や経済効果よりも、商店街振興組合と住区の人々のつながりを活性化の一つとしてミツバチが飼養され

ているのである。

### おわりに

本稿では、都市部においてミツバチの飼養が継続的に行われる背景や意味について考察するために、事例としてミツバチプロジェクトAを取り上げ、その八年間の日誌の分析を行った。

本稿においては、日誌に記されていた内容によってミツバチプロジェクトAがどのようなミツバチ飼養を行ってきたか分析を行った。その結果、一匹の女王蜂を継続的に飼養する傾向から、毎年新たに女王蜂を購入することでミツバチプロジェクトA自体を持続・継続させる選択をしていることが明らかになった。

しかし、本稿においては日誌の分析が不十分である。日誌の情報と社会環境および自然環境の変化や動きと重ね合わせたとき、新たな背景が浮かび上がってくると考えられる。

特に、養蜂業は天候に影響を受ける生業であることは、これまでの専門養蜂家の調査で判明している事実である。よって、八年間の天気、気温などの天候とミツバチプロジェクトAの日誌を照合することで、天候によってミツバチプロジェクトAがどのような飼養方法の選択をとったのかを明らかにすることが可能となってくる。

また、筆者はこれまで、ミツバチプロジェクトAとは異なる都市型養蜂の調査を行っており、それらのミツバチプロジェクトや飼養団体の現状を追跡調査することで、都市型養蜂の中におけるミツバチプロジェクトAの存在や飼養の特異性、相違性を明らかにする。最終的にはミツバチプロジェクトAを中心とした都市型養蜂のミツバチ飼養の現状の可視化を行いたい。

## 註

- (1) 二〇一二「現代社会と養蜂―ミツバチを介した都市社会の再構築―」成城大学大学院文学研究科。
- (2) 二〇一二『養ほう関係参考資料』農林水産省。  
統計資料は農林水産省が各都道府県で把握しているものを集計したものであるため、統計方法は統一されていない。数値には専門家だけでなく、個人養蜂家も含まれる。また、個人養蜂家の報告は任意であり、正確な統計値とはいえないが、全国的な傾向を確認することができる。
- (3) この課題については、二〇一二年の民俗学会年会の発表において「都市型養蜂の現状と課題―ミツバチプロジェクトの事例を中心に―」という題目で検討を行った。
- (4) 合同とは、女王蜂のいない蜂群を別の蜂群と合わせて一つの蜂群にすること。

## 文献表

玄蕃充子

二〇一二『現代社会と養蜂―ミツバチを介した都市社会の再構築―』成城大学大学院文学研究科

農林水産省生産局畜産部畜産振興課

二〇一二『養ほう関係参考資料』農林水産省

## 参考文献

岡田一次

一九九七『ニホンミツバチ誌』玉川大学出版部

佐治靖

一九九五a「ハチとヒトの生態学―会津盆地南縁山地の伝統的養蜂―」『ミツバチ科学十六(二)』玉川大学ミツバチ科学研究センター

- 一九九五b「東日本におけるニホンミツバチの伝統的養蜂―会津盆地南縁山地の事例を中心として―」『日本民俗学第二〇二号』日本民俗学会
- 一九九五c「ミツを飼う―石鎚山系における伝統的養蜂(一)―」『民具集積一』
- 一九九六「ハチとヒトの生態学Ⅱ―四国石鎚山系の伝統的養蜂―」『ミツバチ科学十七(二)』
- 玉川大学ミツバチ科学研究センター
- 二〇〇七「阿武隈高地におけるニホンミツバチの伝統的養蜂」『福島県立博物館紀要21』
- 福島県立博物館
- 宅野幸徳
- 一九九一「西中国山地における伝統的養蜂」『民具研究九十六』日本民具学会
- 二〇〇一「西日本の伝統的養蜂の技術」『自然と文化六十七』日本ナショナルトラスト
- 農林水産省生産局畜産部
- 二〇一四「養蜂をめぐる情勢」農林水産省
- 柚洞一央
- 二〇〇五「日本における養蜂業の経営動向―全国調査の結果から―」『北海道大学大学院文学研究科 研究論集 第五号』
- 二〇〇六「日本の養蜂業における移動空間の狭域化と生産形態の多様化」『地理学評論 第七九卷 第十三号』日本地理学会
- 吉田忠晴
- 一九八八「養蜂 日本の養蜂」項『日本大百科全書二十三』小学館
- 渡辺孝 古武成美編 古島敏雄監修
- 一九八三『明治農書全集九』農山漁村文化協会